

「東京おひさまベリー」の育苗・定植技術の改善

【背景と目的】

令和2年度から現地栽培が始まり、好評を得ているが、一部で育苗期の高温が要因と考えられる果房発生の抑制、収穫量の減少が報告されている。今後も高温が想定されるため、従来の露地栽培の育苗や定植の方法を見直す必要がある。

そこで、育苗・定植の時期や環境が翌春の収量に及ぼす影響を明らかにし、育苗・定植技術の改善を図るとともに、栽培期間の短縮や省力のためマルチ敷設後の定植を可能とする、「ポット苗利用によるマルチ春定植技術」を確立する。

【研究概要】

露地イチゴ「東京おひさまベリー」の従来の育苗や定植の方法を見直すために、苗とり移植（仮植）の有無や本圃への定植時期を変えて、翌春の収量性に及ぼす影響を明らかにした。また、苗とり移植（仮植）の代わりに、ポットに苗を鉢受けし、育苗後にマルチ敷設後の本圃に定植する作業時間や最適な採苗時期も明らかにした。

- (1) 慣行より早い9月下旬に定植すると、通常の10月中～下旬定植よりも収量が増加する。
- (2) 無仮植苗であっても早期定植（9月中～下旬）することで、仮植苗の慣行定植と同等の収量、品質が得られる。
- (3) ポット苗のマルチ春定植では、鉢サイズは収量に影響しない。また、9月下旬採苗のポット苗でも適切な時期に追肥すれば、慣行栽培や仮植苗を春に定植したものと同程度の収量が得られる。
- (4) マルチ敷設後に9月に採苗したポット苗を春定植することで定植やマルチ張りの作業時間を削減でき、圃場の有効活用を図ることができる。